

<報告>

実用音楽研究講義のためのメソッド研究

Research on the Method of Film Scoring

栗山 和樹

KURIYAMA Kazuki

本報告書は2020年度個人研究費（特別支給）により行われた「実用音楽研究講義のためのメソッド研究」について報告するものである。アニメーション、コンピュータゲーム、インターネット、映画など新しいメディアにおける音楽において、専門性をもった音楽大学卒業生に人材を求める企業も少なくない。特に管弦楽を用いた交響乐的な作曲または編曲は、高度な管弦楽について堆積された知識が必要であり、その知識、技術を有する音楽大学卒業生は囑望されている。その社会的ニーズに対応すべく、実用音楽コースでは実践的に実用音楽を学ぶ「実用音楽研究」講義において、映画背景音楽の作曲技術を身につけるカリキュラムを展開してきたが、さらに交響乐的な作品の作編曲に特化した技術を磨くメソッド開発の必要性を強く感じ、新たなメソッド開発研究を模索してきた。そこでハリウッド映画において長年、オーケストラレーターをつとめてきた第一人者、ブラッド・デクター氏のスコアを分析研究し、より交響乐的な作品を生み出すためのメソッド開発を題材に選んだ。

キーワード：映画音楽、管弦楽法、オーケストラレーター、ブラッド・デクター、ハリウッド映画

「実用音楽研究」講義において、小さな編成から管弦楽への編曲ができる技術を学ぶだけでなく、管弦楽にふさわしい交響乐的な作品を作曲できる能力を身につけるメソッドの開発するため、ハリウッド映画で長年、オーケストラレーターとして第一線で活躍するブラッド・デクターのスコアを複数の視点から音楽的に分析しメソッド開発のための研究を行った。

「実用音楽研究」講義で映画背景音楽の分析素材として長年、研究してきたジェームス・ニュートン・ハワード作品から1993年公開のアメリカ映画『デーヴ』より管弦楽作品として研究価値のあるキュー（映画背景音楽）を選択し、聴音により管弦楽総譜を制作し、スタジオミュージシャンたちによるアンサンブルにより弦楽器群のみを録音した。後日、本学オーケストラスタジオにて、学部専攻生および大学院専攻生に演奏を依頼し、弦楽器群の録音素材に重ねる方法で管楽器、打楽器群の録音を行った。この録音物をもとにオーケストレーションを担当したデビッド・デクター氏の管弦楽法を分析研究した。この素材は「実用音楽研究」講義で長年、ドラマタイズする音楽として研究を重ねてきたが、今回はじめてオーケストレーションにフォーカスしてこの作品を分析し、交響乐的な作曲のメソッドを模索すべく、「音響的特徴」「構造的特徴」という2つの視点により分析を行った。

音響的特徴に関する分析では、和声構造の発達した西洋音楽の周波数分布は低周波数ほど大きな強度をもつ「ピラミッド型」と、低音から高音にむけて音の強度が強くなる逆三角形の構造をもち、高音域一帯に広がる音色をもつ「汎高域型」に分類し分析を行った。

構造的特徴を視点においた分析では、管弦楽の定型書式、ユニゾンに焦点をあて分析、考察を行った。

今回のメソッド開発の目標は、管弦楽用編曲技術の向上を意図するものではなく、交響乐的な原作品をどのように作曲するかという作曲技術向上のメソッド開発を目標としている。この分析で得られたピラミッド型と汎高域型それぞれの特徴を生かした楽曲の骨格づくりの必要性と、楽曲構造におけるフレーミングの明快さをもつ原作品の作曲技術向上の必要性を実感した。それに加えて、管弦楽の共鳴は管弦楽法によるものではなく、和声進行自体にも交響乐的な響きをもたらす要因を持つことが明らかになり、これら分析結果をいかしたメソッドの開

発を今後、さらに進めていきたいと考えた。